

火花

第 29 号

特別号～第 4 分冊～

火 花

第 29 号

特別号 ~第 4 分冊~

共產主義者同盟 (火花)

帝国主義批判と民主主義問題

綱領上、戦術上の原則に関して

〈目次〉

民主主義問題にたいする態度をめぐって	二
問題の所在	二
『XXXXXXXXXX』第九号の論文の問題点	二
二つの誤ったあらわれ	三
帝国主義と民主主義	四
いま生じている国際情勢全体における「資本主義的帝国主義の経済関係」の地位	四
「反動・民族抑圧・併合」と帝国主義	六
帝国主義と政治的民主主義の実現	九
民主主義的要求とプロレタリアートの階級闘争	十
民主主義的要求のための闘争とプロレタリアートの階級闘争との相互関係	十一
ブルジョア民主主義の利用とプロレタリア民主主義（民族問題における）	十七
自国帝国主義（日帝）打倒と政治的民主主義を要求する闘争の革命的利用	二二

1 民主主義問題にたいする態度をめぐって

(一) 問題の所在

民主主義問題は今再び、理論上でも、実践上でもきわめて重要な課題となっている。それは、(a)再分割戦の激化にともない、帝国主義の「反動・民族抑圧・併合」（反革命・抑圧・侵略）が増大し、地方、これにたいする勤労大衆の広範な決起（反帝民主主義）もまた増大していること、(b)民族問題をはじめとする政治的民主主義の問題をめぐって、その解答を(a)の問題においてだけでなく、勝利した「労働者国家」のプロレタリア民主主義の問題としても日々要求していること、(c)以上の指導をめぐって、共産主義運動における混乱が増大していること（日本赤軍の諸君をはじめとするブント系諸派の間でも）、これは、われわれの『XXXXXXXXXX』にもあらわれていること（その一つとして第九号の論文がある）、(d)この間『XXXXXXXXXX』誌上で提起されてきた「戦略・戦術主義」批判との関係で、したがってまた「反帝民主主義」にたいする批判との関係で、かかる「混乱」を克服することが問われていること等々の事情によってである。

そこで以下、第九号の論文の問題点の検討からはじめて、民主主義をめぐる問題の所在をより鮮明にしていくことにする。

(二) 『XXXXXXXXXX』第九号の論文の問題点

同志は、『XXXXXXXXXX』第九号の論文「単一プロレタリアート独裁の旗を高く掲げ、あらゆる連邦プロレタリアート独裁派への批判を強めよう！」で、政治的民主主義の問題について一つの積極的な意見を提起している。

そこで同志は、「……帝国主義ブルジョアジーの動向と有効に闘い、その全面的暴露を組織していけるか否かは、……連邦プロレタリアート独裁派を全面的に暴露していけるか否かにかかっている」（『XXXXXXXXXX』第九号P三七上）として——これは同義反復だと思いが？——ここではおいておく——、「今日、帝国主義・ブルジョアジー」によって「政治的民主主義がつつぎに空洞化されているのにたいし、「連邦プロレタリアート独裁派」は、「その上へのつかり、それ自体を煽り、かくしてブルジョアジーの道をはききよめている」（同前P三八上）と、「連邦プロレタリアート独裁派の総破産」を確認し、それを「エコロジー運動」「反覇権運動」を例にとって実証している。

そして、われわれ「単一プロレタリアート独裁派」（この規定はどこにもないが文脈全体からはこうとしかとれない）の「正しさ」がますます明瞭になったとし、われわれだけが「……広範に拡がっている危機感を革命的に利用する——その根拠を科学的に解明し、そこに他でもなくプロレタリアートの階級性を刻印する——」（同前P三八下）ことができているとしている。

この意見の問題点は、(a)「……われわれは暴露の重点を、（国際階級闘争の）引用者（構造が転換したことそれ自体にはなく、その内実、新たな国際階級闘争の局面、新たな特徴へとすみやかに、具体的に移さねばならない。」（同前P三七上）というムコラ論議

(由)によって問題の所在に接近していること、(d)そこから、政治的民主主義の問題を、「帝国主義・ブルジョアジーの動向」を根拠にして取りあげ、経済的土台(賃金奴隷制と独占・金融寡頭制)から切り離して論じていることにある。

(四) 私にはスコラ論議に思える。というのは、われわれは、『×××××』創刊号『創刊の辞』で「国際階級闘争の構造転換」について確認して以降、第六号β論文、第七号γ論文、またα同志自身の第四、第五号の連載論文、第八号論文は皆、「新たな国際階級闘争の局面、新たな特徴」の暴露を、かかる「構造転換」にまで深めて歴史的、現実的に行ってきたはずだからである。

したがって、α論文は結局、(a)政治的民主主義問題をめぐってあらわれている「連邦プロレタリアート独裁派」——これはいったいどういった概念規定なのであろうか？ まさか、共産主義者同盟蜂起派の「民族共産主義」規定と同一ではあるまいか？——の「総破産」をあれこれの現象において説明しているだけで(この作業が必要でないといっているわけではもちろんない)、「その根拠を科学的に解明」することに失敗しており、(b)もつとも緊要な「政治的民主主義闘争」にどのようにかかわるべきかという問題において、「単一プロレタリアート独裁」と「世界党」ということが独立のスローガンとして提起されているだけで、「そこに他でもなくプロレタリアートの階級性を刻印する」ことに具体的、現実的に成功していないということである。

こうした意見の实践的帰結は、一方で「単一プロレタリアート独裁」と「世界党」についての空文句と、他方で「民主主義派」

への屈服、これかさもなければ、「帝国主義的統治機構への全社会的再編との闘いへ個別闘争を集約せよ！」(ブント七回大会)への逆もどりか、いずれかである。どちらにしろ、今日ますますその深さと拡がり強めていく勤労大衆の自然発生性への拝跪、これである。

(三) 二つの誤ったあらわれ

このような誤りはもちろん、一人α同志の誤りではない。それは、トロンキーヤスターリン以降——というより、ペハンジュタインやカウツキー以降といった方が正確であろう——、共産主義運動の歴史においてくりかえしあらわれている「病氣」である。その今日における頭目は、ユーロコミニズム派!!日本共産党である。

周知のごとく、日本共産党の志向は、戦術・戦術主義(勢力配置論)、綱領の原則部分のお題目化とむすびついた「国家と革命」にたいする右翼日和見主義の体系化にある。この体系は、六一年綱領以降、「従属論」にもつづいた「反帝(反米)・反独占」「民主連合政府」「救国革新統一戦線」によって完成している。ここから、日本共産党は「純粹民主主義派」として登場しているのである。

この同じ誤りの左翼的あらわれは、ブント七回大会路線「帝国主義的統治機構への全社会的再編との闘いへ個別闘争を集約せよ！」に代表されるものである。

この主張は、「攻撃型階級闘争→侵略と反革命の不統一→帝国主義の全社会的再編→侵略戦争」を論理展開の軸とした「一向過渡期世界(論)」を基調にして提起されたといわれている。その内容は、個別闘争(経済闘争・民主主義闘争)を集約することによって「帝

国主義打倒→プロレタリアート独裁樹立」を展望するものである(詳細は後述)。ここから、ブント——もちろんブントにかぎらないが——は「国家と革命」にたいする急進民主主義(左翼日和見主義)としてあらわれたのである。

はっきりしていることは、日本共産党にしろブントにしろ、民主主義問題——したがって帝国主義に反対する広範な勤労人民の決起の問題——を、経済的土台から切り離してとりあげていることである(ここに第九号α論文を「同罪」とする根拠がある)。そして、これこそ最も重要な点であるが、この欠陥は見てきたことから明らかに、資本主義的帝国主義にたいする批判の誤りにその根拠を置いているということである。それは、日本共産党の「従属論」にしろ、ブントの「侵略と反革命(抑圧)」の相互関係をめぐる議論にしろ、現代が「資本主義の独占的段階」としての帝国主義時代であるということにたいする批判を、現代過渡期世界の上部構造を分析するさいに貫徹していないというところにある。その結果、プロレタリアートの階級闘争が後退し、帝国主義に反対する勤労大衆の闘争一般が前面に押し出されているのである。

つまり、日本共産党やブントの民主主義問題にたいする誤りは、その戦術・戦術主義とともに、なによりも帝国主義批判における誤りに根拠をもっているということである。せがひでもこのことを鮮明にし、民主主義問題を帝国主義批判において提起すること、これこそ必要なことである。

■ 帝国主義と民主主義

(一) いま生じている国際情勢全体における「資本主義的帝国主義の経済関係」の地位

さきにも少しふれたことであるが、日本共産党の「民主連合政府戦術」の基礎に「高度に発展した資本主義でありながら、アメリカ帝国主義になかば占領された事実上の従属国となっている」という日本資本主義にたいする認識があるのは周知のとおりである。

かつて——といっても現在もつづいているわけだが——、この認識をめぐって日本共産党と構改派系学者との間で「自立→従属」論争が行われた。この論争の致命的な欠陥は、帝国主義を定義する「五つの基本標識」をめぐるスコラ論議——というのはそこではこの定義の「制約的・相対的意義」をわすれさせて重点を「五つの基本標識」のどこにおくかを軸とした論争であるから——として行われたことである。

レーニンはたしかに——正しくだが——、一九一六年に発表した著作『資本主義の最高発展段階としての帝国主義』で、帝国主義にかんする定義として「五つの基本標識」、

「すなわち、(一)経済生活のなかで決定的役割を演じている独占を創りだしたほどに高度の発展段階に達した、生産と資本の集積、(二)銀行資本と産業資本との融合と、この「金融資本」を土台とする金融寡頭制の成立、(三)商品輸出と区別される資本輸出がとくに重要な意義を獲得すること、(四)国際的な資本家の独占団体が形成されて世界を分割していること、(五)最大の資本主義的諸強国による地球の領土的分割が完了していること」(岩波文庫版P一四五〜一四六)

を提起している。しかし、それは、

「……地上人口の圧倒的多数にたいするひとにぎりの『先進』諸国による植民地的抑圧と金融的絞殺のための、世界体制に成長転化した」(同前P一八)「資本主義の独占的段階」(同前P一四五)

であるところの二〇世紀初頭の「世界資本主義経済の総括的様相」(同前P一五)を分析し、経済的定義として提起したものである。したがって、

「……資本主義のこの段階が資本主義一般にたいしてもつ歴史的地位や、あるいは労働運動における二つの基本的傾向と帝国主義との関係をも念頭におくならば、帝国主義はこれとは別様に定義することができる」(同前P一四六)

すなわち、「寄生的な腐朽しつつある資本主義」(同前P一六五)「死滅しつつある資本主義」(同前P二〇三)「社会主義革命の前後」(同前P二二)——ということをも、レーニンはわすれなかつたのである。

たいせつなことは日本資本主義を分析する場合も、この「資本主義の独占的段階」としての二〇世紀初頭以降の資本主義の「世界体制」を考慮しなければならないということである(例の「国独資論争」もこの点から——したがって仏派のように論としての整理ではなく——総括する必要がある)。考慮することを忘れてはならないのは、今日の時代、情勢を基礎づけているのは「資本主義的帝国主義の経済関係」だということである。そして、この経済関係を基礎にして「国際階級闘争の前進(なかんずく、一連のプロレタリアートによる権力奪取)」と、それにかたいする帝国主義列強による国

際反革命同盟の形成があり、その種々の国際的相互関係があらわれ、というのである。

この点にたいする考慮を忘れなければ、日本資本主義が第二次帝国主義戦争に敗北し、帝国主義という上層を破壊されたとしても、世界金融資本の活動の連鎖のなかで、一定の生産力と数百万の熟練労働力を保持しており、しかも戦後革命の敗北によってプロレタリアート独裁は樹立されず、逆に国際反革命同盟に組み込まれた以上、帝国主義として復活したのは当然だったということが明瞭となるはずである。

では、一向過渡期世界(論)の場合はどうだったのか。

この点で、一向が「体制間矛盾論」や「反帝・反スタ論」にくらべれば抜きんでて現代世界の基礎と、三ブロック階級闘争の根柢と現実に接近していたことは、うたがいのないところである。しかし、一向の場合、現代世界の「資本主義的帝国主義の経済関係」を具体的に分析し、そこから現代過渡期世界の階級間の相互関係を分析していくという道を進むことができなかった。この道を進むかわりに、「攻撃型階級闘争」と「侵略と反革命」との相互関係の分析を理論展開の軸においたのであった。その

結果、プントにおける論争は主に、「八・三論文」を契機に「フランスムかプロレタリアート独裁か」「帝国主義戦争を内乱へ」ではなく、「前段階決戦を世界革命戦争へ」といった「統治形態——あるいは階級攻防の激化——」をめぐる戦略・戦術論争によって領導されたのである(田原芳が七一年に発表した「サイバネティクスか、プロレタリアートの独裁か」もまた、こうした誤りから自

由でなかったことを確認しておく)。

以上でおよそ、日本共産党やプント(一向)の理論水準がどの程度のものであったかを確認できたと思う。以下、これを実践上の問題にひきつけながら、より具体的に見ていくことにする。

(一) 「反動・民族抑圧・併合」と帝国主義

選挙でもってブルジョア議会で「安定した過半数を占め」、自己の「執権」を確立し、立法権を掌握し、合法的に国家機構と独占の民主的規制を履行し、社会主義(革命)へ転化していく、これが「民主連合政府戦術」の内容である。

この「戦術」の理論的基礎の重要な一つとなっているのが、一九五八年の日本共産党第七回大会前の綱領論争において、宮本が提起した、

「支配階級がその権力をやすやすと手はなすものでは決してない」ということは、歴史の教訓の示すところである。われわれは反動勢力が日本人民の意志にさからって、無益な流血的弾圧の道にでないように、人民の力を強めるべきであるが、同時に最後のには反革命勢力の仕方によって決定される性質の問題であるということもつねに忘れるべきではない」(『日本革命の展望』日本共産党中央委員会発行P二二)

という、いわゆる「敵の出方論」である。

この理論にたいし、プントをはじめ左派の側からの批判は、「プロレタリアートはできあいの国家機構を利用することはできず、これを破壊し、プロレタリアートの独裁でとって代えなければならな

い」という「暴力革命」の思想にもとづいて行われてきた。これは、かかる宮本の理論が、権力掌握の決着が「プロレタリアートとブルジョアジー」の武装状態の相互関係によって決まる(平和的にか、流血によってか)瞬間があるということを示したものでなく、構改派の理論展開と同じ土俵の中で、「戦術方針」を決定するうえでの理論的基礎(特別の理論)として提起されたものである以上、まったく正当である。その正当性は、宮本のこの理論が「平和革命必然論」(宮本)で先行していた社会党や構改派にたいする区別の必要性という政治的意図で提起されたものにすぎず、実際には一九七〇年の日本共産党第十一回大会(この大会で日本共産党は「平和革命・議会主義」路線を構改派流に定式化した)をメルクマールとして、

「……内外の反動勢力がクーデターその他の不法な手段にあえて訴えた場合には、この政府(民主連合政府—引用者)が国民とともに秩序維持のための必要な措置をとることは、国民主権と議会制民主主義をまもる当然の態度である。さらに人民の政府ができる以前に、反動勢力が民主主義を暴力的に破壊し、運動の発展に非平和的の障害をつくりだす場合には、広範な民主勢力と民主的世論を結集してこのようなファッショ的攻撃を封殺することが当然の課題となる」(『日本共産党第十一回大会決議』「前衛」No.三二P一六二)

という形で右翼的に定式化されていることを見れば明らかである。

では、宮本—日本共産党の理論的誤りは、帝国主義批判という点では——これこそその項のテーマなのだが——どこにあるのか？

この点で見れば、「反動勢力がクーデターその他の不法な手段にあえて訴えた場合」とか「民主主義を暴力的に破壊し、運動の発展

に非平和的な障害をつくり出す場合」とかいう形で、「反動—民主主義の破壊」の問題を経済的土台（独占の金融寡頭制）から切り離して、なにかブルジョアジーの「選択の問題」としてとらえているところにある。

「反動—民主主義の破壊」は彼らのおしゃべりとは違って、独占と金融資本に照応する帝国主義の政治的特徴なのである。

日本が六大コンツェルンの寡頭支配が確立している独占資本主義として存在しているという客観的事実は、日本共産党でさえ認めるところである。そして、この「独占資本主義」が「資本主義の独占段階」としてあり、しかも二〇世紀初頭以降の、

「……独占と金融資本との支配が成立し、資本の輸出が顕著な意義を獲得し、国際トラストによる世界の分割がはじまり、最大の資本主義諸国による地球上の全領土の分割が完了した、というよりな発展段階における資本主義である」（『資本主義の最高の段階としての帝国主義』P一四六）

という帝国主義時代の歴史的環境の中で成立していることもしかりである。しからばつぎのことを認めなければならぬ。日本においても、世界においてもその支配を獲得しているのは、独占と金融資本だということ。そして、この独占と金融資本の時代の特徴は、「……自由への熱望ではなく、支配への熱望をいたるところにもちこんでいる。あらゆる政治制度のもとでのあらゆる方面の反動、この領域における諸矛盾の極端な尖鋭化、——これがこれらの傾向の結果である。民族的抑圧と併合への熱望、すなわち民族独立の破壊（なぜなら、併合は民族自決の破壊にほかならぬから）への熱望もまた、とくに激化する」（同前P一九

なくなり、反帝（反独占）民主勢力の無原則的な大同団結が前面に出てくるわけである。

一般的に帝国主義諸国で、「反動・民族抑圧・併合」——したがって帝国主義——に反対しているのは一人プロレタリアートだけではない。ひとにぎりの独占（ブルジョアジー）以外の圧倒的な労働大衆が対立しているのである。プロレタリアートはこの帝国主義と対立している点で、その限りでは他の階級・階層と利害を同じくしている。しかし、その目的という点では、その経済的土台という点では同じではない。小ブルジョアジーは、自由競争——したがって「純粋資本主義」——とそれに照応するブルジョア民主主義を求めて、帝国主義に反対する闘争にたちあがっている。他方、プロレタリアートがこの同じ闘争（民主主義的要求のための闘争）に決起しているのは、資本主義（賃金奴隷制）を打破し共産主義社会を実現していくために、自己の教育・訓練・武装を中心にプロレタリアートの階級闘争の条件を拡大強化するためである。すべての小生産者・小ブルジョアジーをこのプロレタリアートの階級闘争に引き入れることが望ましいのはもちろんである。しかし、この階級闘争は、たとえ幾千の年や過渡的段階でプロレタリアートと結びついているとしても、やはりプロレタリアートとは別の利害をもつ独自の階層である。

「闘争の激化は、もちろん、小生産者のあいだでもすすむ。だが、彼らの闘争の鋒先はきわめてしばしばプロレタリアートにたいして向けられる。なぜなら、小生産者の地位そのものが、きわめて多くの点で彼らの利益をプロレタリアートの利益にするべく対立させるからである。」（『ブレハートノフの第二次綱

六）にあるということ。すなわち、

「／独占、寡頭制、自由への熱望にかわる支配への熱望、少数の多額の弱小民族の搾取——すべてこれらが、帝国主義を寄生的あるいは腐朽しつつある資本主義として特徴づけさせる帝国主義の諸特徴をうみだした。」（同前P二〇一）

したがって、同じことだが、

「／民主主義から政治的的反動への転換が、新しい経済のうえに、独占資本主義（帝国主義は独占資本主義である）のうえに立つ政治的上層建築である。自由競争には民主主義が照応する。独占には政治的的反動が照応する」（『マルクス主義の漫画および「帝国主義的経済主義」について』国民文庫版「帝国主義と民族・植民地問題」所収P七三）

かかるに、この問題を「全般的危機論」や「体制間矛盾論」をもちだして理論上曖昧にするのが、日本共産党の諸君の特徴である。この曖昧性こそ、金融寡頭制の抑圧と自由競争の排除とに関連するあらゆる面での反動と民族抑圧が帝国主義の政治的特性であるがゆえに、二〇世紀初頭以降、ほとんどすべて（例外なくすべて）といった方が正確かもしれない）の帝国主義国であらわれている小ブルジョア民主主義的反対派の運動を、日本共産党の諸君が特別の理論にまとめあげている理論上の秘密なのである。

かくして、日本共産党の理論においては、国際的にも国内的にもブルジョアジーにたいするプロレタリアートの非和解的階級闘争が

「……どのマルクス主義者も、資本主義が封建主義にたいし、帝国主義が前独占主義的資本主義にたいして、進歩的であることをわすれないであろう。すなわち、われわれは、帝国主義にたいする闘争ならならにからなまでに支持する権利があるわけではないのである。帝国主義にたいする反動階級の闘争を、われわれは支持しない。帝国主義および資本主義にたいする反動階級の蜂起を、われわれは支持しない。」（『マルクス主義の漫画および「帝国主義的経済主義」について』前掲書P一〇三）

ということである。したがって、

「……民主主義のどのような部分的要求でも、部分的なもの全体のものへ従属させないならば、悪用を生じないというよりなものはない、またありえないのである」（『自決にかんする討論の決算』同前P一六四—一六五）

ということを、また同じことだが民主主義を要求する闘争は、プロレタリアートの階級闘争に従属させなければ悪用されるといふことを、肝に銘じておかなければならないのである。

「……民主主義のどのような部分的要求でも、部分的なもの全体のものへ従属させないならば、悪用を生じないというよりなものはない、またありえないのである」（『自決にかんする討論の決算』同前P一六四—一六五）

ということを、また同じことだが民主主義を要求する闘争は、プロレタリアートの階級闘争に従属させなければ悪用されるといふことを、肝に銘じておかなければならないのである。

「……民主主義のどのような部分的要求でも、部分的なもの全体のものへ従属させないならば、悪用を生じないというよりなものはない、またありえないのである」（『自決にかんする討論の決算』同前P一六四—一六五）

ということを、また同じことだが民主主義を要求する闘争は、プロレタリアートの階級闘争に従属させなければ悪用されるといふことを、肝に銘じておかなければならないのである。

「……民主主義のどのような部分的要求でも、部分的なもの全体のものへ従属させないならば、悪用を生じないというよりなものはない、またありえないのである」（『自決にかんする討論の決算』同前P一六四—一六五）

革命→社会主義革命」という理論の實踐的帰結は、二重に反動的なわけである。第一に、帝国主義の「反動→民主主義の破壊」にたいして「広範な民主勢力と民主的世論を結集して」という具合に運動の方向を提起していることから明らかなように、帝国主義（独占資本主義）にたいして前帝国主義（非独占資本主義）とそれに照応するブルジョア民主主義を要求している小ブルジョアジー（小生産者）の利害を代表している点である。第二に、なんらかの民主主義的改造をもって資本主義と帝国主義が打倒できるかのような幻想—というものは、

「金融資本の支配は、資本一般の支配と同じように、政治的民主主義の領域におけるどうい改革をもってしても、排除されなす」（『社会主義と民族自決権』同前P一五）
のであり、

「資本主義と帝国主義を打倒することは、どんな『理想的な』民主主義的改造をもってしても不可能」（『ベ・キエフスキー（コ・ピヤコフ）への回答』大月書店『戦争・平和・帝国主義』所収P一〇〇）
なのだから——を労働者大衆にふりまいてある点である。

(三) 帝国主義と政治的民主主義の實現

他方、ブントは、「反動→民主主義の破壊」ということについて、日本共産党とはまったく別個の立場から把握してきた。

ブント六回大会、このとき（三期論も同一だが）の理論は、帝国主義権力の介入を根拠に、あらゆる民主主義的要求のための闘

争、経済的要求のための闘争が「反帝」の質をもっているとし、この民主主義的、経済的要求の實現の延長上に帝国主義打倒を展望するものである。つづく七回大会（この大会の基調は、後の赤軍派、ブント九回大会につながっていく）は、これを経済主義と批判した。しかし、その内容は、「国際金融体制の動揺（市場分割戦の激化）→先進国相互のダンピング戦→階級闘争の高揚（帝国主義打倒の要求を内部に秘めている個別闘争）」→「反帝闘争を日本革命へ」ということにはたいする「帝国主義の不均等発展と攻撃型階級闘争との相互関係→侵略と反革命の相互関係→帝国主義的統治機構への全社会的再編」→「個別闘争をかかるとの闘いに集約せよ」というものでしかなかった。つまり、六回大会と七回大会（それ以後も）との関係は、反帝民主主義闘争の展望（戦略・戦術）をめぐる対立があつただけで——したがって階級意識を権力奪取の意識までたかめねばならないといったことから経済主義批判がなされただけで——自然発生している民主主義的要求や経済的要求のための闘争に「政治性（戦略・戦術）」を付与して、そのまま「帝国主義」打倒へまともあげていくという点で同一だったのである。

ブント七回大会の「帝国主義的統治機構への全社会的再編との闘いへ個別闘争を集約せよ」の理論上の内容は、つぎのようものである。
「ノ日帝の危機の外化である東南アジア反革命侵略にたいする闘いと、帝国主義的世界的動揺を基底とする大合理化、賃金抑制にたいする闘いを通して日帝権力を破壊に追いこむのである。帝国主義的統治機構への再編との闘いは、この二つの闘いを統

合し、発展させる環である。」（『共産主義』一一号P四五）

「個別闘争を権力との闘いの包括性をもつ全人民的闘争として指導することが必要である。」（同前P一七）

「個別闘争を反帝反政府闘争に成長させることをとりして、全人民的政治闘争に結合させていく。」（同前P二〇）

要するに、反革命侵略にたいする闘い（民主主義闘争）と経済闘争を「帝国主義的統治機構への再編との闘いに集約し」（実は意識性を付与）、全人民的政治闘争→帝国主義打倒を展望するものである。

こうした理論の特徴は、帝国主義の全社会的再編を根拠にして、あらゆる民主主義的また経済的要求が資本主義・帝国主義のもとでは「實現不能」ということを前提（暗黙のうちに）にしている点である。換言すれば、かかるブントの理論（帝国主義打倒への展望）はそのことよって成立しているということである。

日本資本主義が、「帝国主義→過渡期世界」という国際的環境の中で帝国主義として復活し、その独占と金融寡頭制に経済的基礎を置いて「帝国主義的統治機構への全社会的再編」を進めており、「反動・民族抑圧・併合」を熱望していること、これはその当時（六〇年代後半）も現在も厳然たる事実である。しかし、この「反動・民族抑圧・併合」の基礎であるところの独占——そして帝国主義——は、決して純一なものとして存在するわけではない。

この独占は、「純粹な独占ではなくて、交換や市場や、競争とならんで存在する独占」（『党綱領改正資料』国民文庫版『党綱領問題』所収P四三八）である。つまり、

「この独占は資本主義的独占である。すなわち、資本主義のなから発生して、資本主義、商品生産、競争という一般的な環境

のうちにあり、しかもこの一般的な環境との不断の、そして解決の道のない矛盾のうちにある」（『資本主義の最高の段階としての帝国主義』P一六一）
ということである。そして、

「……帝国主義と金融資本主義は、古い資本主義のうえに立つ上部構造である。その上層を破壊するならば、古い資本主義が現われるであろう。古い資本主義を伴わない純一の帝国主義というよりなものがあるという見地をとることは、希望を現実と取りちがえることを意味する」（『ロシア共産党（ボ）第八回大会』国民文庫版『党綱領問題』所収P六〇七）
ということである。

このように純一の「独占」「帝国主義」が存在するのではなく、独占と自由競争の、帝国主義と資本主義の矛盾、対立物の統一として存在しているということは、その政治的特徴である「反動・民族抑圧・併合」をめぐる、つまり民主主義の破壊と民主主義の實現をめぐる、つまりそうである。

たしかに「自由競争には民主主義が照応する。独占には政治的反動が照応する」のである。しかし、かかる経済分析を考慮していえば、

「一般に政治的民主主義は、資本主義のうえに立つ上部構造の可能な諸形態のうちの（一つ）理論上は、『純粹』資本主義にとつて正常な形態であるが（）にすぎない。資本主義も帝国主義も、事実がしめしているように、あらゆる政治形態のもとで発展し、それらすべての形態を自分にしたかわせる。だから、民主主義の諸形態のうちの（一つ）とその諸要求のうちの（一つ）『実

現不能」をうんぬんするのは、理論上根本的にただしくない」
（『自決にかんする討論の決算』国民文庫版『帝国主義と民族
・植民地問題』所収P一三二）

のである。プロントの「実現可能」にたいする「帝国主義的統治機構
への全社会的再編」を根拠とするナデ切りは、政治的条件的な意味
での「実現可能性」と経済的全面的な意味での「実現可
可能性」との混同であり、理論的にあやまりなのである。
問題のすべては、帝国主義が資本主義の発展と住民大
衆の民主主義的傾向の成長を全的になくすものとして存在している
わけではなく、これら民主主義的傾向と独占の反民主主義的傾向と
の敵対性を激化させるといふことにある。

日本資本主義は、直接の買収、政府と取引所との同盟という経済
的手段によって資本の全能の力を間接に実現し、もっていわゆる「
戦後民主主義」といわれた政治形態のもとで発展し、その形態を自
分にたがわせてきたのである。帝国主義が復活し、「戦後民主主
義」「五五体制」の崩壊がいわれ、「総合安保」が追求されている
現在においても、この構造は取引所の権力が強化されている——大
銀行は取引所と融合し、併合している——だけで基本的に同じであ
る。重要なことは、日本資本主義が帝国主義として復活するととも
に、民主主義を否定する独占（帝国主義）と民主主義をめざす勤労
大衆との敵対を激化させていることである。

これを理論的に正しく把握しえなかつたプロントであればこそ、急
進民主主義として敗北・解体の終末を迎えたのも、いつてみれば当
然のことなのかもしれない。今から約六四年も昔、レーニンが批判
したカウツキーは、日本共産党だけでなく、プロントにも生きつづけ

び経済的激動、もつとも尖锐な階級闘争、内乱、革命および反
革命の一時代とみなされなければならない」（『ヨーロッパ合
衆国のスローガンについて』国民文庫版『マルクス・エンゲル
ス・マルクス主義』所収P二一五）
のである。

日本共産党もプロントも、その戦略・戦術主義的発想にもとづいて、
このことを、「革命の型」や「革命の道すじ」の問題として考えて
きた。この考え方からすれば、プロレタリアートの革命と民主主義
的要求のための闘争との相互関係を「民主主義闘争（あるいは民主
主義革命）→プロレタリア革命」と把握したのも理の当然である。
はたして、それは正しいのだろうか？

この点に関して、コミンテルンの「統一戦線戦術」の簡単な総括
を提起しておくことはむだではないはずである。
レーニンの指導が貫徹した最後のコミンテルンであったといわれ
る第三回大会は、ドイツ革命をはじめとした一連の敗北があつて、
「……運動はわれわれが予期したほど一直線にはすすまなかつた」
（『共産主義インタナショナル第三回大会』I全第三二
巻P五一二）

「いま必要なことは、革命を根本的に準備し、先進的な資本主
義諸国における革命の具体的な発展をふかく研究することであ
る」（同前P五一三）

とさう事情のもとで開かれた。レーニンはすでに第二回大会で、
「国際共産主義運動の発展における現在の特徴は、自己
の独裁を実現するためのプロレタリアートの準備が、圧倒的多
数の資本主義国でまだ完了していない……」ということである」

ていたわけである。

「……トラストおよび銀行の経済の基礎にふれないで、トラ
ストおよび銀行の政策と『闘争する』ということは、結局は、
ブルジョア的な改良主義と平和主義に、お人よして無邪気な願
望に、帰する」（『資本主義の最高の段階としての帝国主義』
P一五二）。

では今日、プロレタリアート（党）は民主主義的要求のための闘
争にどのようにかかわることが求められているか？ 以下、これの
検討である。

Ⅲ 民主主義的要求とプロレタリアートの階級闘争

(一) 民主主義的要求のための闘争とプロレタリアートの階級闘
争との相互関係

基本的なことからはじめていく。
プロレタリアートの階級闘争（プロレタリアートの革命）、これ
は、

「……一つの行動ではなく、一つの戦線にわたる一つの戦闘
ではなく、激烈な階級的諸衝突の一時代であり、全戦線にわた
る、すなわち経済および政治上のあらゆる問題にかんする、長
くつづくいくたの戦闘」（『社会主義革命と民族自決権』国民
文庫版『帝国主義と民族・植民地問題』所収P一四）
である。したがって、

「単一の行為と見るべきものではなく、嵐のような政治的およ

（『共産主義インタナショナル第二回大会の基本的任務につい
てのテーゼ』国民文庫版『労働組合論』所収P九八八）
したがって、

「……いま共産党の当面の任務は、革命を促進することでは
なく、プロレタリアートの準備をつよめることだという結論が
出てくる」（同前）

として、
「……改良主義的傾向や『中央派』にたいする闘争をつよめ
……さらにこの闘争の性格を変え」（同前P九八九）、
「例外なくすべての組織、結社、団体……の内部に、共産
主義者のグループまたは細胞をつくらねばならない」（同前P
九九二）

「……さう深く大衆の中へ」、「大衆とさう緊密に結び
つけ」というスローガンをせむとも実現しなければならぬ」（
同前P九九四）

と提起していた。レーニンは、第三回大会でこれを更に発展させ
ていふより明瞭にといふべきだろう——

「工業的に発展した資本主義諸国における資本主義の主要な支
柱は、まさに労働者階級のうち第二および第二半インタナシ
ョナルの組織された部分である」（『共産主義インタナショナル
第三回大会』I全第三二巻P五一三）

という現実を考慮し、

「資本主義的発展した国々でプロレタリアートが組織されて
いはいはるほど、われわれがそれだけ根本的に革命を準備する
ことを歴史は要求しており、そしてわれわれはそれだけ根本的

に労働者階級の多数者を獲得しなければならぬ」(同前)

と提起した。しかし、この大会で決定された「戦術に関するテーゼ」は、レーニンのかかる提起が全面的に貫徹したものではなく、「労働者階級の多数を獲得しなければならぬ」という基本的命題をつくりあげた上での「妥協」(『共産主義インタナショナル第三回大会』「共産主義インタナショナルの戦術を擁護する演説」L全第三二巻P四九八)であった。というのは、このテーゼにはトロッキー、ラデック等の日和見主義的思想が貫徹していたが、

「すでに第二回大会でわれわれは、中央派はわれわれの敵であると言った。……第二段階は、みずからを党に組織したのち、革命の準備をすることを学びとること」(同前P五〇五)

が問題となつてゐるにもかかわらず、ドイツの左翼をはじめとする多くの「小児病」患者が、「受動から能動性への移行」とかいう空文句によつて、

「どのようにして指導権をにぎるかということさえ学びとつて『さす』(同前)

という条件のもとでは妥協が必要だつたということである。

トロッキー、ラデック等の日和見主義とは、

「……改良主義者や中間主義者の最小限プログラムの代りに、共産主義インタナショナルは、プロレタリアートの具体的な要求と、それらが全体としてブルジョア権力を崩壊させ、プロレタリアートを組織させ、プロレタリア独裁への闘争におけるすべての段階を解明するような諸要求の系列のための闘争を代置する。……共産党の任務は具体的な要求に対するこの闘争を拡大し、深め、かつ統一することである。……部分的要求

のために闘う労働者は全ブルジョアジーとその国家機関に対する闘争へと自動的に駆りたてられるであろう」(コミンテルン第三回大会で採択された戦術に関するテーゼ)『コミンテルン・ドキュメント』所収P二二七)

という意見にあらわされている。これが日和見主義であるというのは、この「戦術」を發展させていけば、プロレタリアートの独裁を實現するために、革命的な宣伝・煽動にもついで労働者階級の多数を獲得するという任務が消え、かわりに「具体的な要求」(部分的な要求)にもついでた日和見主義者との統一ということが全面的に押し出されるからである。なぜなら、「プロレタリア独裁への闘争におけるすべての段階を解明するような諸要求の系列のための闘争を代置する」という考え方は、「共産主義と労働運動の結合」——つまり、

「組合と党とのより緊密な接近——これが唯一の原則である。組合と党を接近させ結びつける努力——これがわれわれの政策でなければならぬ」(『論集』「二年間」の序文)L全第一三巻P九七)

ではなく、労働運動それ自体の發展的過程をめざして、政策を提起することとなるからである。そして当然、

「組合の党派性はもっぱら組合内部の社会民主主義者の活動によつてのみ達成されなければならず、社会民主主義者は組合のなかに結束の固い細胞を組織しなければならぬ」(『労働組合の中立性』国民文庫版『労働組合論』所収P409~410)

のではなく、労働組合や労働運動の戦闘化、あるいはそこにおける要求で党派性を達成しようとするようになるからである。したがつ

てこの「戦術」の結果は、一方での自然発生性への拜跪と他方でのセクト主義(引きまわし)、これなのである。しかるに、彼らときたら、「第三回大会をもつて」……『戦後の革命的動揺が終つたことが自覚された。……統一戦線の利用、すなわち大衆の過渡的要求というプログラムに基づいて組織することによつて大衆を獲得することに方向が転換された』(『コミンテルン・ドキュメント』P一九七)

と最大限にもちあげたのである。レーニンは、こうした日和見主義にたいして『われわれは払いすぎた』(L全第三三巻所収)等を書いて闘争したが、「左翼」小児病の根づよい拡がりとの闘争が押し出されていたこともあって、それを正しく理解した指導者はすくなくあった。レーニンは闘いなかばにして、一九二四年一月死去した。

こうした後、コミンテルンを中心にして「戦術」問題にたいする混乱はどうしようもないほど進行した。「社会ファシズム論(主要打撃論)」「過渡綱領—介入戦術」「反ファシズム統一戦線—統一戦線政府」等々。スターリン、デミトロフ(七回大会)とトロッキー(第四インタナショナル)との相違は、前者が勤労大衆の自然発生性をそのまま特別な理論にまとめあげたのに対し、後者が自然発生的闘いと権力奪取とのかけはしを理論化せんとした、といったレベルのものでしかないといえる。それはちょうど、スターリンが「戦術・戦術」の概念を軍事用語から政治用語に横すべりさせたのにたいし、トロッキーが「戦術」概念を権力闘争の問題として提起したという戦術・戦術主義の枠内での相違と同じである。

先進諸国の正当派「共産党」がそろつて「民主主義革命—社会主義革命」を軸として種々の理論を提起し、運動を指導しているのは、

実はこういつたことにも根拠をもっているのである。この点でいえば、今日、日本共産党が「民主連合政府戦術」を提起し、純粹民主主義派として登場しているのは、かかる日和見主義「戦術」の正当な継承者として首尾一貫してゐるといふことができる(『XXXXXX』第七号『論文』項参照)。

すこしまわり道をした。話しをもとにもどす。

問題は、「共産主義と労働運動の結合」という原則を、プロレタリアートの階級闘争と民主主義的要求のための闘争との相互関係においても貫徹しなければならぬということである。これは、プロレタリアートの階級闘争に民主主義的要求のための闘争を従属(結合)させること、これがその理論的帰結となる。レーニンでいえば、「民主主義のための闘争と、社会主義のための闘争とを結合し、前者を後者に従属させるすべを知らなければなりません。この点にすべての困難があり、この点にすべての核心があります」(『イネッサ・アルマンド』L全第三五巻P二七九)であり、

「……プロレタリアートは、共和制をもふくめたすべての民主主義的要求のためのその闘争を、ブルジョア打倒のためのその革命闘争に従属させることによつてはじめて、その独自性をたもつことができる」(『社会主義革命と民族自決権』国民文庫版『帝国主義と民族・植民地問題』所収P二二二)

ということである。

こういふと民主主義派の諸君は、民主主義的要求(部分的要求)のための闘争からでもはじまつてプロレタリア革命が勃発しようとするかとも知れない。たしかに、ある一定の条件のもとでは

そのいりことが存在する場合もありうる。

主要なもの（プロレタリアートの革命）を見失うことは、最大の誤りである。それを第一位におくことが、プロレタリアートの党の絶対条件である。したがって、プロレタリアートの革命（階級闘争）に従属させ、正しい相互関係をもうけ、それに並列させながらすべての民主主義的要求を提起しなければならない、ということである。そこで話をもうすこし限定して、民主主義の実現とプロレタリアートの革命との相互関係について述べることにする。

民主主義派の諸君は、レーニンが、「完全な民主主義を実現しなければ、社会主義の勝利のありえないのと同様に、民主主義のための全面的な、一貫した、革命闘争をおこなわないプロレタリアートは、ブルジョアジーにたいする勝利を準備することはできない」（同前P一四）と述べた点をとらえて（一般的に言ってだが）、「民主主義革命、社会主義革命」の特別の理論の根拠としている。

しかし、レーニンの提起していることは、それを深く理解するならば民主主義派の諸君にとって不利である。

レーニンが提起しているのは、つぎの二点である。第一に、形式的民主主義であるブルジョア民主主義——というのは、形式的に一律にすべての市民に政治的権利と諸自由を宣伝するが、実際には行政の運用からしても、また主として勤労者の経済的奴隷制のためにも、勤労者はいくぶんでも広範にこれらの権利や自由を利用できない状態にねおかれておられるから——にたいし、プロレタリアート独裁を樹立した党が、

「まさきき、資本主義によって抑圧されてきたまさにその住

く誤って把握しているということになる。

では、問題がこういうふうに「すべての民主主義的要求のための闘争を、ブルジョア打倒のためのその革命闘争に従属させる」ことにあるとしたら、そこにおけるプロレタリアート（党）の基本的な任務とはなにか？

さきにも述べたように、帝国主義の「反動・民族抑圧・併合」は民主主義的要求のための勤労大衆の広範な決起を呼びおこしている。このことがどういふことかというところ、

「どんな民主主義的ブルジョア国家でも、被圧迫大衆は、資本家の『民主主義』によって宣伝される形式的な平等と、プロレタリアートを賃金奴隷にする実際の何千といふ制度や妨害とのあいだのはなはだしい矛盾に、一歩ごとにつかちかちかしている。まさにこの矛盾が、資本主義の腐敗や、虚偽や、偽善にたいする大衆の眼を、ひらかせるのである」（『プロレタリア革命と背教者カウツキー』国民文庫版P三三）

を、帝国主義がより一層促進しているということである。

ここに、プロレタリアートの党の「宣伝・煽動」の方向がある。それは、かかる「資本主義の腐敗や、虚偽や、偽善にたいする大衆の眼を」さらに、帝国主義の本性（独占と金融資本の時代）とその基層にある資本主義の本性（賃金奴隷制）にたいして「ひらかせる」ことである。したがって、「宣伝・煽動」の任務は、労働者階級の状態の相対的悪化の根拠には、賃金奴隷制度（その独占的段階への発展）があり、そのため自己を解放するにはブルジョアジーから国家権力を奪取することが不可欠の条件であることを明らかにし、またその他の勤労被搾取大衆全体にむかって、資本主義社会では

民諸階級、すなわちプロレタリアートと農民にそれらの権利や自由を実際に提供」（『ロシア共産党（ボ）綱領草案』国民文庫版『党綱領問題』）所収P六九四）

する「完全な民主主義」を実現しなければ、革命の最後の勝利はありえないということである。第二に、

「民主主義が階級的抑圧を排除するものではなく、ただ階級闘争をいっそう純粋に、いっそう広範に、いっそう公然と、いっそうげしくするにすぎない」（『マルクス主義の漫画および「帝国主義的経済主義」について』国民文庫版『帝国主義と民族・植民地主義』所収P一一八）

以上、プロレタリアート（党）は民主主義的要求のための闘争を支持し、参加し、「民主主義のための全面的な一貫した革命闘争をおこなひ、自己を教育・訓練・武装し、ブルジョアジーにたいする勝利を準備しなければならない、ということである。したがって、この第二の点に關していえば、

「……ある時期にとつては、あらゆる民主主義的目標……は社会主義革命にブレイキをかけかねない」（『イネッサ・アルマンドへ』L全第三五巻P二七九）

こと——たとえば、
「すでに運動が勃発し、すでに革命がはじまら、銀行の接収が必要となつておるときに、ちよつと待った、まず共和制を強化し、法制化したまえ、うんぬんと！ われわれに呼びかけるといつたたい」（同前）

——ということをおわすれてはならないのである。

こうであるから、民主主義派の諸君は、レーニンの提起をまったく

彼らの地位は絶望的であり、自己を資本の圧制から解放するためにはプロレタリアートについていかなばならないことをあきらかにすること、これである。同時に（同じことだが）、資本主義と帝国主義を打倒するためにはどんな理想的な民主主義的改造でもってしても不可能であり——またただ政策を阻止しても——、ブルジョアジーにたいするプロレタリアートの「内乱、蜂起、革命戦争」が必要であることを明らかにすること、これである。

ここからして、プロレタリアートの党はその民主主義的要求のための闘争における基本的任務を、ブルジョア民主主義と闘い、あらゆる問題、事件をとらえて、そのうちその偽善を暴露することにおかなければならないということになる。すなわち、

「ブルジョア民主主義は、その本性からして、平等一般の問題を、民族的平等の問題もふくめて、抽象的にまたは形式的にたてるのが特徴である。人格一般の平等という外見にかくれて、ブルジョア民主主義は、所有者とプロレタリア、搾取者と被搾取者の形式的また法律的平等を宣伝し、こうして抑圧されている諸階級をもっともはなはだしく偽まんしている。平等の概念そのものは商品生産関係の反映であるが、ブルジョアジーは、人格が絶対に平等であるかのような口実をつかって平等の概念を階級の根絶に反対する闘争の具にかえておる」（『民族および植民地問題にかんするテーゼ原案』国民文庫版『帝国主義と民族・植民地問題』所収P一八七）

ということを暴露し、
「平等という要求の真の意味は、ただ階級の根絶の要求にある」（同前）

ことを説明することである。

以上が、マルクス・レーニン主義者にとっての「民主主義的要求のための闘争と、プロレタリアートの階級闘争との相互関係」の基本的原則の内容である。つぎにこれを、民族問題を例にとって、より具体的に説明していくことにする。

(二) ブルジョア民主主義の利用とプロレタリア民主主義(民族問題における)

今日、マルクス・レーニン主義者を自称する者は、だれでも皆、「民族自決権」(政治的民主主義)を承認する。しかし、いったいなんのためにそういったブルジョアの権利を承認しなければならぬのかというと、多くの自称マルクス・レーニン主義者はしどろもどろになる。それは、ユーロコミニズム派、日本共産党等が(半分以上中国共産党もだが)、この「民族自決権」をプロレタリア国際主義の原則にまつりあげ、「労働者国家」間の関係に原則として適用することを要求し、またそのことと結びついて「自主独立」を主張していることであらわれている。さらにまた、ベトナム・カンボジア戦争、中国・ベトナム戦争が象徴しているように、プロレタリアート(党)が権力をにぎった「国家」間の関係における「民族・国境・国家」問題のきわめて複雑な登場によっても証明されている(『共産主義通信』第六号山本論文参照)。このことは、「民族自決権」ということに足をとられてあらわれている、共産主義運動内部の小ブルジョア民族主義的偏見が、プロレタリアートの階級闘争の前進にとって、きわめて巨大な障害となっていることを意味し

ている。

これをとらえて「民族共産主義」と規定したり(仏派)、「連邦プロレタリアート独裁派」と規定したり(?)することは、ブント系諸派にとってさほどむずかしいことではないであろう。たしかに、民族主義——じたがって民族自決の要求——は、人類史における資本主義の誕生・発展に照応したものであり、本質的にプロレタリア国際主義とはあいれないものである。マルクス・レーニン主義者は、いっさいの民族主義のかわりに国際主義を押し出し、あらゆる民族の高度な統一による融合を押し出さなければならぬ。そして、小国家よりは大国家が、連邦制よりは単一の共和制(中央集権制)の方がそれぞれより進歩的であることもまた、うたがいのないことである。なぜなら、

「連邦は、平等なものの結合体であり、全体の同意を必要とする結合体である。いったいどうして、一方のかわが他方のかわに自分への同意を要求する権利というものがあがるだろうか? これは不合理である。われわれは、原則的に連邦制に反対する。——連邦制は、経済的結びつきを弱める。それは、単一の国家に役立たない型である」(『シャウミヤンあての手紙』[全第一九巻P五三九])

ということだからである。また、たしかに、現在の「資本主義、帝国主義、過渡期世界」を打破し、プロレタリアートの革命を最後まで組織していくにあたっての不可欠の政治的条件(広義)は、「単一の世界プロレタリアート独裁樹立」にある。これは、「労働者は祖国を持たない」という『共産党宣言』の命題の一つであり、レーニンにおいて発展させられた命題の意味である。すなわち、(a)プロ

レタリアートの経済的地位が国際的であり、その敵もまた国際的であること、(b)後進諸国の革命闘争は、先進資本主義諸国のプロレタリアートの援助を受けるとるならば、資本主義の段階を経ずに直接に社会主義革命に向ってすすむことができること、(c)ロシア革命の勝利以降、プロレタリアートの独裁を一国的なものから国際的世界的なものにしていくことが焦眉の任務となっていること、等の意味である。そしてここから、「労働者の国際的統一が一国的統一よりも重要であること」、「中央集権的な新しいインタナショナルを創建しなければならぬこと」、国家の軍隊ではなく、党の軍隊(世界赤軍)が必要なこと」といった実践上の帰結がでてくることも、たしかな事実である。しかし、だからといって、これを根拠に、「単一プロレタリアート独裁—世界党—世界赤軍」を独立のスローガンとして取りあつかったり、そこからすべてをナデ切ったりすることはやはり誤りである。なぜなら、そのような態度は、理論上は空文句(一般的な、曖昧な文句や、大言壮語)であり、実践上は反動的役割をはたす(というのは、現在の諸条件のなかでの実際上の問題の解決を世界プロレタリアート独裁——の時代——まで延期することになる可能性があるから)ことになるからである。

空文句をやめたければ、マルクス・レーニン主義の革命的現実主義(唯物弁証法)を自己のものとしなければならぬ。それは各々の命題を、(a)歴史的、現在の、(b)他の諸命題と関連させて、(c)歴史的具体的経験と結びつけて、考察することの實行である。

レーニンは、一九一六年十一月三〇日付の手紙「イネッサ・アルマンドへ」で、

「『共産党宣言』には、労働者は祖国をもたない、と述べてあ

ります。これは正しいことです。だが、そこで述べているのは、これだけではありません。そこにはまた、民族国家を形成するうえでプロレタリアートの役割はいくぶん特殊なものであるとも、述べてあります。第一の命題(労働者は祖国をもたない)をとって、それと第二の命題(労働者は自身を民族的階級として構成するが、それはブルジョアジーとはちがった意味においてである)との関連をわすれるならば、それは大きな誤りでしょう」(国民文庫版『レーニン教育論』所収P七四)

と強調している。そして、つづけて、

「では、この関連はどういう点にあるのでしょうか? 私の考えでは、プロレタリアートは民主主義運動(ある時機の、ある具体的な情勢のもとでの)では、この運動を支持することを、(したがってまた、民族戦争で祖国を擁護することを)拒否できないという、まさにその点にあるのです」(同前)

この『党宣言』の思想を正しく復権することが重要である。もとより、これは革マル派のように「世界革命」と「国革命」の概念整理からはじめてスコラ論議をやることを意味しないし、また第二次ブントのように「世界同時革命戦略」——「世界革命戦争」といった戦略・戦術論議で解決することも意味しない。そうではなく、かかる問題を現代の「資本主義、帝国主義、過渡期世界」批判において提起することが要求されているのである。すなわち、第一に、(a)民族内のあらゆる交通の発展と頻繁化、民族隔壁の破壊・資本・経済生活一般、政治・科学等の国際的統一が進んでおり、ここからブルジョア民族主義がプロレタリアートに感染するのをふせぐために非

妥協的に闘わねばならないこと、(b)プロレタリアートが一連の国々で権力を掌握しながらも国家ごと、地域ごとに分断されていること、および、先進諸国のプロレタリアート(党)のたちおくれと結びついて発展・成長しているスターリン主義の小ブルジョア民族主義の偏見と非妥協的に闘わねばならないこと、等である。第二に、(c)帝国主義(列強)にたいする——一部でノ連にたいする——民族解放運動(民族国家創造運動)が闘われており、これを支持すること、(d)「労働者国家」にたいする帝国主義の経済的、政治的、軍事的介入に反対し、「防衛戦争」を支持すること、等々である。

したがって、まず、つぎのことを考慮するより要求する。

「資本主義は、民族国家の形成なしには封建制を打倒することはできなかったが、いまやその古い民族国家が資本主義にとっては窮屈なものになった。資本主義は集積をいちじるしく発展させたので、多くの産業部門がシンジケート、トラスト、億万長者の資本家団体に掌握され、ほとんど地球全体が、あるいは金融的搾取の無数の糸で他国をがんにがらめにするることによって、あるいは植民地という形で、これらの『資本王』のあいだに分裂されてしまった。」(『社会主義と戦争』国民文庫版P九一)

そして現在、一連の民族運動の勝利によって、多くの国が帝国主義のもとで「政治的地位」を達成しているとはいえ——もちろん現在なお、厳密な意味での植民地国は多く存在する——、ひとにぎりの帝国主義列強によって、経済的にも、政治的にも、軍事的にも従属の網でおおわれ、搾取、収奪されている。というのも、「金融資本—帝国主義」の国際政策——それは、世界の経済的、政治的、軍事

的に分割(再分割)するための列強の闘争に帰着するのであるが——

「……国家的従属のいくたの過渡的形態を創りだす、……この時代にとって典型的なものは、植民地領有国と植民地という、国の二つの基本的グループの存在だけではなく、政治的には形式上独立国でありながら、実際には、金融上および外交上の従属の網でおおわれている、多様な形態の従属国が存在するということである」(『資本主義の最高の段階としての帝国主義』岩波文庫版P一四〇)

が、貫徹している——アジア・アフリカ・中南米の多くの国家を見よ——からである。

抑圧民族の労働者の現実的地位と、被抑圧民族の労働者のそれとは、この資本主義的帝国主義の本性と国際政策からして、民族問題上、決して一様なものでないことはあきらかである。この点で、一九一六年にレーニンが分析した相互関係は、今日なお多くの「抑圧民族の労働者の現実的地位と、被抑圧民族の労働者のそれ」において、客観的な事実関係であるといえる。

「(一) 経済上の相違、——抑圧国の労働者階級の一部は、抑圧民族のブルジョアがつねに被抑圧民族の労働者からむごい搾取をして手にいれる超過利潤のおこぼれをもらう。……抑圧民族の労働者は、被抑圧民族の労働者(および住民大衆)を略奪するうえで、ある程度まで、自国ブルジョアの助力者である。/(二) 政治上の相違、——抑圧民族の労働者は、被抑圧民族の労働者にくらべて、政治生活のいくたの領域で特権的地位を占めている。/(三) 思想上または精神上の相違、——

抑圧民族の労働者はつねに、学校でも、実生活でも被抑圧民族の労働者を軽蔑または軽視する精神で教育されている。」(『マルクス主義の漫画および「帝国主義的経済主義」について』国民文庫版『帝国主義と民族・植民地問題』所収P九二)

プロレタリアートの党の民族問題における綱領上の中心になるのは、このような現実の国際的相互関係からいって、諸民族を抑圧民族と被抑圧民族にわけることではない、ということである。そして、一方で民族自決権——政治的自決、国家的独立、民族国家の形成——の承認、他方でのあらゆる民族の労働者階級の統一、これ以外にはプロレタリアートの党の政策はないということである。この政策は、抑圧民族と被抑圧民族のそれぞれの労働者を、つぎのような国際主義の精神で教育するより要求する。すなわち、抑圧民族のプロレタリアートが、被抑圧民族の「分離の自由」——

注意しておくが、これは一分離に賛成する「義務がある」ということではなく、被抑圧民族がこの問題を自分で解決することに賛成する義務があるというものである——を主張し、被抑圧民族のプロレタリアートが諸民族の「自由意志による結合」を主張する、という精神である。これをもうすこし、具体的にいうところである。抑圧民族の共産主義者の任務——(a)「自国」の帝国主義が植民地でめぐらしている奸計を容赦なく暴露し、(b)あらゆる民族解放運動を口先ではなく行動によって支持し、(c)自国の労働者の心に植民地や勤労住民にたいする真に友愛的な態度を育てあげ、(d)自国の軍隊内で植民地民族のあらゆる弾圧に反対する系統的な宣伝、煽動を行う。被抑圧民族の共産主義者の任務——(a)抑圧民族の労働者と被抑圧民族の労働者との完全な無条件な統一——組織的な統一も含めた統一——

の必要性をとくに説明し、それを実現し(これなしには、ブルジョアジーのあらゆる策略、裏切り、ベテンにさいして、プロレタリアートの独自の政策を、他の諸国のプロレタリアートと彼らとの階級的連帯性をまもり抜くことはできない。というのは、被抑圧民族のブルジョアジーは、いつでも民族解放のスローガンを労働者をあざむくためにつかっているからであり、これらのスローガンを支配的な諸民族のブルジョアジーとの反動的な協調に利用するからである。)(b)民族ブルジョアジーにたいしては条件つきで抑圧民族と闘うかぎり(で)支持し、ブルジョア民主主義的な解放運動を共産主義の色彩で粉飾することには断固反対し、(c)「勤労者ソビエト」等々をつくることによって、前資本主義的諸関係が支配している国々にソビエト制度の基本原則を適用するためにあらゆる力を傾ける。

そこでつぎに、この民族問題を国家権力を掌握したプロレタリアート(党)の政策の問題として論じていくこととする(もちろん、これは政治上別個の問題というわけではなし)。

資本主義の独占的段階であるところの帝国主義(金融資本の時代)が地球上を分割しつくし、再分割を展開していることは、「民主的に決められる」国境——これは基本的に、資本主義の発生期に照応する——をぶちこわしていることを意味している。かくして、帝国主義は、社会主義にたいしてより民主的でない境界を遺産としてのごし、連の領土併合をのこす。そして同時に、このこと——つまり、帝国主義が力関係に応じて国境をかえ、長年にわたって植民地や弱小民族を抑圧してきたこと——からして、

「……被抑圧諸国の勤労大衆のあいだに、抑圧民族一般——これら民族のプロレタリアートもふくめて——にたいする憎悪だけでなく、不信の種をものこ」(『民族および植民地問題にかんするテーゼ原案』国民文庫版『帝国主義と民族・植民地問題』所収P一九四)

すのである。しかも、この憎悪と不信は、
「……プロレタリアートの公認の指導者たちの大部分が卑劣にも社会主義をうらぎり、『自国の』ブルジョアジーが植民地を抑圧し、金融的に従属している諸国を略奪する『権利』を擁護すること」(同前)

が歴史上くりかえしあらわれているという事情また、
「国がおくれておればおるほど、その国の、零細農業生産、家長制度、隔離状態はつよく、この結果、かならず、もつとも根ぶかい小ブルジョアの偏見、すなわち民族的利己主義と民族的偏狭性の偏見は、とくにつよくなり、頑固になる」(同前)という事情等によって、より一層強いものとしてのこるということである(中国—ベトナム、ベトナム—カンボジア等々の「紛争」にもあらわれている)。

そして、この点で大事なことは一般的に、
「これらの偏見は、先進諸国で帝国主義と資本主義が消滅し、後進諸国の経済生活のあらゆる基礎が根本から変化したのちになつてはじめて消滅するものであるから、これら偏見の死滅は、きわめてゆっくりとすすまざるをえない。ここからして、各国の意識的な、共産主義的なプロレタリアートは、きわめて長いあいだ抑圧されてきた諸国および諸民族の民族感情の遺物にたいしては、とくに用心ぶかく、とくに注意して、接することがせひ必要とされ、また同じように、さきにあげた不信と偏見をなるべくはやくなくすためには、ある程度の譲歩が必要とされてくるのである」(同前)

「経済的変革は、すべての民族を刺激して、社会主義にむかつてすすませるが、しかし、このばあいには、革命——社会主義国家にたいする革命——も可能であれば、戦争も可能である。経済への政治の順応は不可避免的におこるが、しかし、それは一挙に円滑にはなく、単純でもなく、直接でもない。エンゲル

スは、彼が、すべての「他民族」にたいして——つまり植民地民族だけにでなく——適用している一つの条件に国際主義的な原則、すなわち他民族に幸福をおしつけることはプロレタリアートの勝利をほりむりすることを意味するということ原則だけを、「確実な」こととして提示している」(『自決にかんする討論の決算』国民文庫版『帝国主義と民族・植民地問題』所収P一九)

勝利したプロレタリアートの党の政治は、これらすべてからして、資本主義、帝国主義諸国との関係においてだけでなく、その「労働者国家」間の関係においてもまた、その内容においても、「一方での民族自決権の承認、他方でのあらゆる民族の労働者階級の統一」のより完全な実現、ということである。では、それは国家の型の問題としてはどうなるのであろうか?

プロレタリアートの革命の目的とするところは——この点で言えば——小民族への人類の細分状態をなくし、諸民族のいっさいの孤立性をなくし、諸民族の接近をはかるばかりでなく、さらに諸民族を融合させる(民族の止揚)にある。この見地からざきに、「連邦制」が「不合理」であり「経済的結びつきを弱め」「単一の国家に役だたない型である」こと、したがって、

「他の諸条件が同じであるならば、われわれは、無条件的に中央集権化に賛成であり、連邦的關係という素町人的な理想には反対である」(『大ロシア人の誇りについて』同前所収P十一)ことを確認してきた。

この点からいっても我々はプロレタリアートの解放の条件として、

世界単一のプロレタリアート独裁が必要であることを明らかにして闘う必要がある。と同時に、連邦制の問題は、その時々の諸条件を考慮しながら、プロレタリア世界革命前進の見地から見ると真に有効である場合のみ例外的、過渡的なものとして採用すべきである。以上、民主主義的要求のための闘争は、プロレタリアートの階級闘争をすべての民族・国家で前進すすす上の条件にすぎないということである。

最後に、すべての国のプロレタリアートと結合して自国帝国主義を打倒していく問題について若干ふれておくことにする。

(三) 自国帝国主義(日帝)打倒と政治的民主主義を要求する闘争の革命的利用

日本における階級闘争の性格が、ブルジョアジーにたいするプロレタリアートの階級闘争であり、世界革命の一環としてプロレタリア革命が日程にのぼっているのは周知のことである。これは、日本の資本主義、帝国主義の現実から提起されているだけでなく、今日の経済

的、政治的情勢からも、より切実に提起されている。そこでこの問題を、最近の経済的、政治的情勢の分析からはじめて——というのも前者の問題は——で述べていることで十分であるから——提起していくことにする。

さて、七〇年代が「ベトナム—カンボジア」「中国—ベトナム」戦争と、イラン革命とによってその幕を閉じたとすれば、八〇年代はソ連のアフガニスタンへの侵攻と、光州（韓国）蜂起とでその幕が開かれたといえる（これらにたいするわれわれの側での評価——直接的意味での——は、ここでは取り扱わない）。

ソ連のアフガニスタン侵攻について、中国は「三つの世界論—反霸権外交」の立場からさっそうく批難声明を出し、「反ソ統一戦線」——事実上の——の強化を訴えている。ユーロコミニズム派—日本共産党は「自主独立」（民族自決を最高の原則とする）の立場から、弱々しく批判を行っている。

一方、米帝はこれを契機に、経済的にも——「穀物禁輸、高技术製品の禁輸」等——、政治的、軍事的にも——「オリンピックボイコット、SALT中絶、再軍拡」等——対ソ（対ベトナム）策動を強めている。この動向は単純に「反共」の動機ではなくて、相対的に地盤低下し、インフレ、不況、失業が増大する一方の経済情勢の中で、地球上の分割（再分割）における絶対的地位を取りもどさんとする欲求に基礎をおいている。

米資本主義経済の地盤低下は、七一年のニクソン「新経済政策」——巨大な国際独占株（いわゆる多国籍企業）の世界的規模での活動の自由への欲求を背景とし、替為レートの弾力的変更という一点にすべてをしようせすることによるドルのまき返しと統一世界市場

の保障を求めた政策——以降も、七〇年代全体をつうじて進行した。そして、今日では日本共産党系の学者（北田芳治）でさえ、

「アメリカの工業製品の輸出は一九七〇年代をつうじてすでに西ドイツに追いこされている。そして現在の瞬間、総輸出額でも確実に西ドイツに一位の座をあげわたしつつある。日本がそのアメリカに急速に接近しつつある」（『経済』一九八〇年七月号P十五）

と確認せざるをえない現実となっている。これは他でもなく、米帝の「産軍複合体」が「冷戦—朝鮮戦争」「インドシナ戦争」等を媒介に、一貫した「ドルのたれ流し」によって膨張しつつある一方、他の非軍事的産業の競争力を一定程度掘りくずしてしまったこと、これに根拠をおいて存在する。したがって、カーターのはじめた「イラン革命、ソ連のアフガニスタン侵攻」等を契機とする「再軍拡」路線は、この根拠と構造を更に一層拡大する以外のなにもものでもない。米帝は今再び身をもって、今日が「帝国主義と帝国主義戦争」の袋小路の時代であり、そこから抜けだす道は、プロレタリアートの世界革命以外にないことを実証しているのである。

日本資本主義はこうした状況の中で、その経済力の増強を基礎にかかる米帝の「対ソ」策動に積極的に歩調を合せながら、独自利害をかけて再分割戦の一角を本格的に担いはじめている。

日本資本主義が米資本主義とあらゆる面で深く結びついていることは事実であるが、それは日本共産党が主張するような民族問題、国家権力問題における「従属」ということではない。そうではなく、それは日本資本主義（帝国主義）が、米資本主義を中心とする世界資本主義体制の経済的、金融的網（IMF・GATT等々）および、

米帝を盟主とする国際反革命同盟に深く組み込まれているということである。もとより、この経済的、政治的、軍事的な枠組みが米帝の利害が第一義的に貫徹しているものであり、日本資本主義が米資本主義に、日本の独占体が米の独占体に自衛隊が米軍にそれぞれはばかれていた側面を持っていることは事実である。しかし、それは帝国主義列強における力関係の問題であり、同時にプロレタリア世界革命の共同利害における問題なのである。どっちにしろ、日本資本主義が六〇年代後半と七〇年代全体をつうじて独占と金融寡頭制をますます強化し、アジアを中心に進出してきていることは、うたがひ余地のない客観的事実である。

したがって、かかる再分割戦への日帝の参加は、
「世界資本主義一般の危機と矛盾の露呈の中で、日帝も、その相互関係から例外ではありえず、巨大独占資本（なにかんずく重化学工業部門）を中心とした過剰生産と過剰資本の累積（停滞、腐朽）を基礎として、日本資本主義の構造的危機と矛盾を露呈している。これから脱出する方向を、日帝ブルジョアジーは、産業構造の再編『合理化』、資本輸出の増強、再分割へのより積極的な参加——そのための戦争準備、国家機構、社会機構の帝国主義的改編の一層の促進——に求めている」（『XXXX』第九号P九〇下）

ということである。最近にわかに活発化してきている「防衛論議」や、独占グループ・自民党が提起している「総合安保」構想がその政策上の中心的なあらわれである。「総合安保」は、(a)軍事、外交、政治、経済、社会などの各分野にまたがるバランスのとれた「安全保障体制」の確立、(b)「多国間の相互依存構造」の構築、によって

なりたっている。(a)は経済力に見合う軍事力の増強——これは重化学工業、素材産業を中心に、新たな巨大市場を提供することにより強く規定されている——を軸に日本資本主義社会全体の安全保障、つまり「軍事的脅威だけでなく、災害、経済パニック、国内治安など、危機管理のため」の「法体系と組織、手段の整備」、これをめざすものである。(b)は「投資、技術移転」を軸として、「国際分業や国家間の産業協力」の構築をめざすものである。要するに巨大な過剰資本の解消を基底的動機とした、先進資本主義諸国への資本、商品輸出と同時にによりも、後進諸国への資源、労働力等をねらった資本輸出、企業進出である。

「日本資本主義とブルジョアジーは、かくして今日、対外的には他帝国主義諸国との対立激化、三ブロック階級闘争との対峙、対内的には生産と資本の集中、集積、諸部門間の不均衡の増大（独占利潤の獲得をめざす資本の移動にもとづいて）、小生産（者—引用者）の駆逐、労働者階級の生産条件の悪化（物価騰貴、失業等）、そして労働者大衆の反抗、決起、等々資本主義、帝国主義に固有の諸特徴を増大させている。」（同前）
これらすべてのことからして、すべての国のプロレタリアートと結合して自国帝国主義を打倒するという日本プロレタリアートの当面する闘いは、

「……非合法党を強化し、あらゆる分野で自国のブルジョアジーに宣戦布告する」（同前P五）
という任務を提起している。

『XXXXXX』——第一回代回以前の内部機関誌である。

火花 第二九号

発行日 一九八七年二月一五日 第二版

編集発行 共産主義者同盟（火花）

定価 三〇〇円